

# 39th Concert Concertino di Kyoto

コンチェルティーノ・ディ・キョウト第39回演奏会



1997 11/22 土曜日 7:00PM

京都市東部文化会館

主催／才能教育研究会京都支部



この合奏団を始めてから39年目になりました。  
弦楽器は独奏もできますが本来は合奏楽器です。何人かが集まって夫々のパートの役割をきちんと果たすことにより立派な合奏ができます。これは簡単なことのようにですが、そこには一人一人の気配り、信頼、譲り合いといった心が必要になり、それが出来た時には個々の技量の集合以上の結果が出せます。私はそのまとめ役としてこのコンチェルティーノ・ディ・キョウトに期待しながら努力しております。メンバーは皆とても仲良しで何時も楽しく練習していますので、この心の教育の成果が今夜の演奏会に発揮されることを信じて楽しみにしております。

## プログラム

レスピーギ：リュートのための古代舞曲とアリア第3組曲

Italiana	イタリアーナ
Arie di Corte	宮廷のアリア
Siciliana	シチリアーナ
Passacaglia	パッサカリア

フォルクマン：チェロと弦楽のためのセレナーデ

ロッシェニ：弦楽のためのソナタ第5番

アレグロ・ビバーチェーアンダンティーノーアレグレット

チャイコフスキー：弦楽セレナーデ

Pezzo in forma di Sonatina	ソナチネ形式の小品
Walzer	ワルツ
Elegie	エレジー
Finale	フィナーレ

## 曲目紹介

今宵は19世紀から20世紀にかけての弦楽合奏のための名曲を演奏いたします。

リュートのための古代舞曲とアリア第3組曲

Ottorino Respighi (1879-1936)

リュートは中世以来の有棹撥弦楽器の総称で、その弦数、調弦法、形状等は多種多様でしたが、メロディーと和音の両方が演奏できるので、古代(16、17世紀頃)に於ては音楽的に無くてはならない重要な楽器でした。しかし、鍵盤楽器の発達と共にその地位を奪われ、パツハ、ヘンデルの頃にはすっかり滅亡してしまいました。ただその中で、ギターとマンドリンだけが辛うじて今日まで生き残りました。この曲は、16世紀末にリュートのために書かれた曲をもとに、レスピーギが弦楽合奏用に書き直した曲です。ピチカートで奏されるチェロの伴奏は、リュートの伴奏型を再現していると考えられます。レスピーギの48才頃の作品です。彼は音楽家の父親の元に生まれ、父からピアノとバイオリンの手ほどきを受けた後、音楽学校でバイオリンとピオラと作曲法を修め、作曲家として名を広めました。20世紀はじめには、イタリアにオペラのほかに純器楽曲で新しい息吹を吹き込んだ作曲家として知られています。

チェロと弦楽のためのセレナーデ第3番 二短調

Robert Volkmann (1815-1883)

フォルクマンは、ドイツの作曲家です。生地で合唱長をつとめていた父親から音楽の手ほどきを受け、21才の時に本格的に作曲の勉強を始め、シューマン、メンデルスゾーンからも影響を受けました。交響曲や室内楽などの作品を残し、生前その作品はよく演奏され、メロディックな作風で親しまれたと言われていますが、現在ではあまり演奏会の曲目にのぼりません。セレナーデ第3番は、1871年に作曲されました。この曲は、独奏チェロのホルンのような導入モチーフではじまります。全体が休みなく通して弾くように作られていて、繰り返し奏されるチェロの旋律にオーケストラが対話するように答えていきます。単一楽章の中にはいろいろな断片がはさまれています。そして最後にはじめのチェロのモチーフが現れ幕を閉じます。

弦楽のためのソナタ第5番 変ホ長調

Gioacchino Rossini (1792-1868)

ロッシェニは若い頃、ポローニャ音楽院でチェロを専攻し、その後ポローニャの劇場でバイオリン奏者、チェンバロ奏者として活躍したといわれています。しかし、彼の主な器楽曲が作曲されたのはほとんど音楽院終了前で、その後彼の作曲家生命はほとんどオペラに依存しています。

彼は、修業時代6曲の弦楽ソナタを作曲しました。それらは1804年の夏、音楽院に入る2年前の12才の頃の作品です。このソナタはバイオリン2、チェロ、コントラバスという編成になっており、第1、第2を問わずバイオリンパートがかなりの重要性和技巧性を発揮していることと、チェロとコントラバスが決して同じ楽譜をオクターブで重複して演奏しないという特色があります。さらに、チェロやコントラバスにしばしば独奏的な部分が出てきますが、



作曲当時、彼はアマチュアのコントラバス奏者で、様々な芸術の保護者でもあったアゴスティーノ・トリオツの邸に滞在し、彼のためにこのソナタを書いたという説もあります。

### 弦楽セレナーデ ハ長調

Pyotr Ilyich Tchaikovsky (1840-1893)

チャイコフスキーはペテルブルグで法律学校を出て、一度は法務省に役人として勤務するようになりましたが、22才の時ペテルブルグに新しくできた音楽院に入り、幼時からとても関心のあった音楽の道へと進むことになりました。

音楽院では、師の方針で音楽的に遅れているロシアに今もっとも大切な物として、西欧の古典派からせいぜいシューベルト、メンデルスゾーンあたりまでの作風や書法を学生達に徹底的に身につけさせることを求めています。しかしチャイコフスキーはまじめにそれらの書法を学ぶと同時に、友人から啓発されてもっと新しいシューマンやその後の作曲家の表現力にも少なからぬ関心を持っていました。

彼の弦楽セレナーデには、ドイツの古典音楽並びにロシア音楽の影響がとても強く現れています。第1楽章は重々しく調和のとれた序奏、シューマン風の第1主題（原調）古風な感じの第2主題（ト長調）そしてまた第1主題（原調）第2主題（原調）で、最後に序奏を繰り返します。第1楽章はロシア音楽というより古典に帰ろうとするドイツロマン主義音楽のような構成です。スラヴ人の作曲家が、第1第2領主台を長調で書くのは珍しいことであると原書の解説書にも述べられています。第2楽章は、 Rond 形式のワルツ。そして第3楽章で初めてスラヴ的な気分のエレジーが現れます。チャイコフスキーの憂いに満ちた優美な旋律です。第4楽章では穏やかな序奏の後、それとは対照的な第1主題が始まります。これも彼特有のスラヴ的な気分を現しています。

### コンチェルティーノ・ディ・キョウト

指揮 新井 覚

#### 1st violin

畑 亜季 ・ 大塚 真衣 ・ 松川 朋子  
上田 真希 ・ 笠木 愛 ・ 木田 淳子

#### 2nd violin

大塚 真帆 ・ 山本 佳奈 ・ 畑 都加  
安居佑季子 ・ 山本 怜奈 ・ 高木 玲

#### viola

江村 孝哉 ・ 仲佐 悦子 ・ 江村美由紀  
田中めぐみ

#### cello

森田 健二 ・ 長瀬 香恋

#### contra bass

村田 和幸



Violin  
Bow  
Strings



マツヲ弦楽社

京都市上京区河原町通丸太町下ル東側  
マツヲビル4F ☎602 ☎075-251-1774



華麗なひびき……

世界の銘器を常時、  
多数在庫いたしております。  
お買い求めは、  
ご来店のうえご相談下さい。

**BUNKYO GAKKI**



MFG.  
CO.  
LTD.

〒112 東京都文京区小石川2-1-11 電話03(3811)2084代 FAX03(3818)5253

